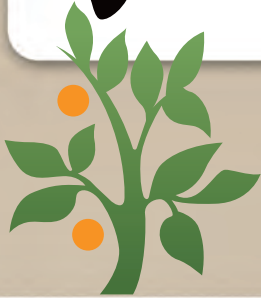
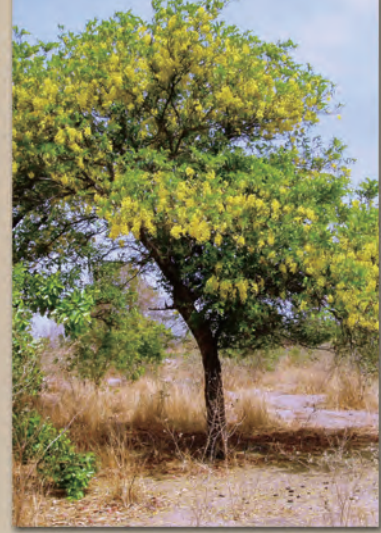


からばす



CARA

ASSOCIATION POUR LA COOPERATION ET L'AUTOGESTION RURALE EN AFRIQUE DE L'OUEST



春を彩るアカシアの開花

企画/編集/発行 特定非営利活動法人
カラ=西アフリカ農村自立協力会

震

災と一通の手紙を通して

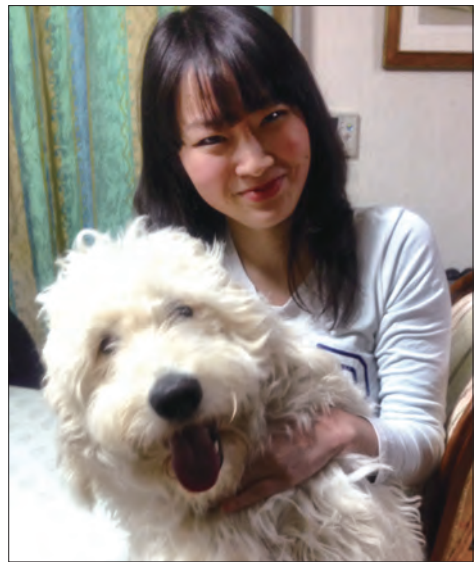
津田塾大学3年 大内侑美

去年の春、我が家に新たに犬がやってきた。白い、無邪気なお転婆娘である。名前は「マリ」。マリ共和国に因んで付けた名前だ。現在渡航できない状況から、一層アフリカの遠さを感じてしまうことがある。そのため早くマリに行けるように、との願いを何も知らない子犬に託してしまった。マリちゃん、と名前を呼ぶたびにマリ共和国に近づいている気がする。

「私に出来ることは何だろう」。日常が一瞬にして消えた3月11日。東日本大震災は私の想像をはるかに超えた。当時、受験生であった自分たちがどうなるのかと考えると不安でたまらなかった。震災後は日常が変わってしまい、不便で仕方なかった。

スーパーに行けばすぐに買うことが出来る食料、夜遅くまで起きていても何とも感じない明るさ、蛇口をひねれば好きなくらい手に入れることが出来る水。私たちはそれを「当たり前」とし、突然失ってから不便だと感じる。いつもは並ばないで買える食べ物に、大勢の人達が長い列を作って手に入れようとしている光景をはじめは信じられなかった。春先のまだ寒い時期、灯油を買いに4時間並んでもタンクローリー車が来なかった時は愕然とした。

夜は暗く、風呂に入ることが出来ない。両親が仕事へ行かなければならず、私は家に一人であることが多く、度重なる余震に恐怖を感じ、とても不安で怖かった。ようやく電気が回復した4日目、温かいご飯が食べることが出来た。風呂にも入れるようになった。ガスが復旧しないと風呂に入れない近所の人達を風呂に呼び、近所付き合いも深まった。P2へ→



今回の大震災でインフラが崩壊してしまった時に初めて、作られたものの脆さと心の脆さに気付いた。そして「困ったときはお互いさま」をより意識するようになり、助け合いが大切であることを改めて感じたのだった。

海外からの支援は震災直後の時点で、142の国と地域からあり、その中には途上国と思われる国からの支援もあった。沢山の義援金を送ってくれた国もある。国の大小、金額の大小に関わらず支援の有難さを感じた。

一か月ぶりに登校出来るようになると、玄関正面口には支援先のマリからお見舞いの手紙が掲示されていた。私の母校である宮城学院では、2004年から文化祭の活動を通して、バザーの収益金をカラを通して西アフリカ・マリ共和国に送り、その資金で識字学校を建設し、村の女性の自立や子供の育成を支援している。読み書きが出来るようになったことで、遠く離れた私たちのことを心配してくれる、その手紙にとっても感動した。この手紙がきっかけでこれまで母校が支援を続けてきたことに改めて興味を持つようになり、手紙をくれた村長を身近に感じお会いしたいと思うようになった。そして、今までは私の中で遠いアフリカであったが、その距離が少し縮まった気がした。

「自分達に出来ることは何か」という原点から始まった宮城学院の生徒会のマリへの支援。助きたい・役立ちたい、という思いは、一方通行の片思いではなかったのだ。このように支援が確かに実を結んでいるということを知った時、私はマリの発展に携わりたいという強い思いに駆られた。受験生だった私は、マリのような発展途上国の経済を学ぶため、進学先を急遽変更し、今の大学を受験した。そして、晴れて大学生になった私は、長期休みになったらマリに行けると思っていたが、2012年3月のクーデター以来、外務省が邦人に対して退避勧告、渡航延期勧告を出していることを知ってしまったのだった。現実とはとんとん拍子には進んでくれないらしい。

現在私は、大学に通う傍らカラの手伝いをしてマリに行ける機会を狙っている。現地での活動の様子を少しずつ覚えながら、必須となるフランス語と格闘している最中だ。今の私に出来ること、それはいつ状況が変わったらすぐに飛び出せるように準備をすることである。マリに行ける日が来るまで、少しずつ準備を進めていくつもりだ。

平成25年度下半期を振り返って 村上一枝

相変わらず、マリへの渡航が許可されないため、日本から現地スタッフに指令を出して活動を進めております。

しかし遠隔地からの通達で事業が進めることができるようになったこともカラの進歩と考え、満足する面もあります。

カラ主催コンサート「かけはし2014」が3月16日に開催されました。

春浅い3月16日に、歌手の原田康子さんのご協力で、今年で16年目となるコンサートが開催されました。マリ共和国の女性の健康と自立、子供たちの健康で幸せな日々を願ってのコンサートです。バックは人気のギターリストの並木健司さん、ピアニストの中上香代子さん、そしてベース担当は菅井

信行さんです。曲はシャンソンやラテンの名曲ばかりで、楽しい時間がアツと言う間に過ぎてしまいました。

お客様はカラの会員の方を主体に、原田さんのファンの方々等で、会員の皆さまに広報しないうちに札止めとなっていました。多くの方が毎回楽しみにお越し下さる顔馴染みです。歌の前にマリの活動状況を少しお話いたしますが、皆さまとても高い関心をお持ちのようで、うなずきながらお聞き下さり、カラ支援の大きな力となってくださいます。当日、原田さんはステージでマリの布製のドレスで歌ってくださったので、メンバーの方々の写真と一緒にみなさまにご紹介いたします。

今回は12月18日に「かけはし スペシャル」として、少し違った趣向で開催予定です。



カラのチャリティーコンサート出演者。左からピアニスト:中上さん、ベーシスト:菅井さん、歌手:原田さんとギターリスト:並木さん



マリの布で作られた衣装で歌う原田さん

ソモノダガ ブゲー村に始めて井戸が設置されました。

2013年4月の「からばす29号」にて皆さまにご支援をお願いいたしました、ソモノダガブゲー村の浅井戸設置とトイレ建設について、2014年2月に浅井戸2基が村で始めて設置されました。

この村はニジュール河畔スレスレに位置する村で、雨季の増水期には小高い場所へ引っ越すという状況の村で、学校も商店も産院もありません。

今回初めて公共の施設として浅井戸2基が設置できたのは、皆さまの暖かいご支援のお陰です。村人たちは早速井戸水を汲み上げ、飲用水として、また日常の炊飯にと使用しております。文字を書くことの出来ない村長からは羊一頭と口頭によるお礼がカラへ寄せられました。

写真は新設された浅井戸の側で村のソモノダガブゲー村K会(村人への健康学習を啓発している女性たちの会)が、水を汲み上げている写真です。

カラスタッフのアワがソモノダガブゲー村のK会の研修時に出かけましたが、村はカラのローカル宿舎からとても遠く、泊り込みとなります。その際に「水もトイレも無くて非常に困った」と言っていました。

雨季には道路が決壊してしまうため、カラの宿舎のある村や、その他の村へも往復が不可能にな



設置された井戸から水を汲むソモノダガブゲー村のK会のメンバー

る【陸の孤島】になります。カラの宿舎のあるコニナ村からの15kmほどの行程は、バオバブの木がたくさん生えている小さな溪谷を通り、大きな真っ白い鳥が飛び交い、水生の花々が咲く美しい沼を経て、美味しいザバン(野生の果樹)の木が生い茂る藪の道を通って行きます。

2011年には村の要請で識字教室を建設しました。近くの村に学校が無いので義務教育を受けることができず、識字学習で学んでいます。そして村の青年がカラの識字教師育成研修会に通い、初めての識字教師が誕生しました。また、村には未だにトイレがなく、相変わらずニジュール川がトイレ代わりになっています。引き続きみなさまのご支援をお願いいたします。

ソニブレ村の識字教室建設が完了し、使用されています。

村の人たちの念願だった識字教室が建設されました。この村は、カラのローカル事務所(宿舎)のあるコニナ村に属する離れた集落で、耕作に向けた土地だったため、トウジンヒエ栽培をしているうちに、村の何家族かが移り住み、独立した村となりました。人口は100人ギリギリの状態です。未だ清潔な水がありません。

以前は子供を就学させる意識がなく教育に見向きもしませんでした。周囲の村が教育に熱心になって来たので、その影響を受けたのだと思います。カラは現在識字教師育成研修会を開催しています。その研修会には各村から2名の研修生の参加を申し出ましたが、ソニブレ村では、自主的に4人の青年を送ってきました。今は村の青年が教師として育ち、識字教室が必要になりました。2月にはこの村に新しい識字教室が落成しました。



ソニブレ村に新設された識字教室。
村人たちによる建設です

ママブグ村の産院開設と新規開設の産院への準備が進んでいます。

問題が発生し他の村より後れを取っていたママブグ村の産院が2月に開設し、バマコで1年間の研修を受けた助産師が村に戻り、産院で働いています。産院の維持管理を担当する自主委員会メンバーは、慣れない経理についてしっかりアワから教育を受けました。経理などは、村の人にとって今まで経験がなかったので、理解するのに大変苦労したようです。学習の甲斐があり、今は東京事務局へ産院の収支を報告できるまでになりました。

現在は、2014年12月にクーラコmun内のティネジェ クリバリー村に新規に産院を開設する為、村出身の女性がバマコ市の診療所で助産師研修を受けています。この女性はニヤラ



ジャラ(32歳)といい、2人の子を持つ既婚者で、小学校6年生までの課程を終了した女性です。多分村には小学校がありませんから、他の村から嫁いで来た女性だと思われます。彼女は非常に優秀で「看護師になれるくらいの能力を持っている」と指導医者からの報告がありました。2014年の12月には研修が終了し、その後は村に戻り新しい産院で働くことになっています。これはカラが開設する8番目の産院となります。我々はただ単に、開設する産院と助産師の数を喜んでいるわけではありません。我々の喜びは、日本からの最小限の支援で、村の人々の意識や生活環境が予想以上に変わって行く姿から、皆様のご支援の成果を目にすることです。これは他の全ての支援項目に言えることで、この女性の目覚ましい発展が多くを女性を目覚めさせ、裨益効果を生み、多くの村から識字教室建設を望む声に繋がってきています。

毎年恒例のエイズ予防キャンペーンについて

現在はカラの活動地域には、優秀な助産師や看護師が誕生しました。そのお陰で以前のように町の診療所からドクターを呼ばなくても、カラ独自でエイズ予防キャンペーンを実施出来る様になりました。今回は3ヶ村で開催され、当日は「お祭り」同様の感覚でとても賑やかでした。村の人々にとっては歌って踊れるチャンスで、楽しくて、楽しくてしょうがないのです。日本では勉強の前に歌って踊って楽しむようなことはないですよ。

2014年1月には、村の宿舎から約100~150kmも離れた、遠くの地域の3ヶ村を対象に3泊4日で行いました。総責任者はスタッフのアワ カンサイです。彼女のアシスタント講師として、経験が長く優秀な助産師のアワ ダンバとマリム ダンベレの2人を選び、この3人が主になって実施されました。他に数人のアシスタントスタッフが同行しました。非常に優秀なコニナ村の青年 シャカ ベリテがリーダーです。

キャンペーンに欠くことの出来ないミュージシャンは、開催された村から選ばれた素人楽隊です。ティネジェ クリバリー村では、本事業開始以降初めてのオバさん楽隊でした。水を張った金属製のたらいやバケツに浮かべたひょうたん(カラバス)を叩いてリズムを取って歌う「ギター」と呼ばれるもので、即興で歌います。多分「今夜はカラがシダ(SIDA;エイズのこと)について教えてくれるよ~、みんな集まって~」とでも歌ったのでしょう。私もぜひ参加したかったです。



お揃いのユニホームを染め上げ、みんなでギターを演奏しています

アワ主催の学習会

現地スタッフのアワという名前は既に何度も機関紙で紹介しておりますので、皆さんもご存知かと思います。彼女はカラの優秀なスタッフで、カラの事業のうち女性適正技術、衛生をメインに他の

事項にも大活躍です。2014年1月から、毎月1回カラが育成した助産師を彼女の宿舎に呼んで勉強会を開催しました。これはアワの発案で、経理、産院の清掃、技術的な面、村のK会への指導方法にも及んでいます。

写真は育成した7名の助産師とアワ(向って左から3人目)です。この勉強会には一番遠くでは10km先のキバ村から来る助産師もいます。村から選ばれたエリート的女性たちで、誇りを持って張り切って仕事をしています。彼女たちは出産介助だけでなく収支の記載も覚えて、きっと将来日常生活に役立つようになると思います。美人揃いです。



カラの助産師7人衆。

村における女性の事情について

カラがバブグ村を中心に支援事業を開始した1994年当初は、現在のように村の女性たちが収入を得て自立し、専門職を身に付け、村人へ教育をするようになるとは、とても考えられないことでした。

当時、女性は常に男性の権力下で生きるのが一般的で、複数の妻を持つ夫を表面では誇りとし、男性に好かれるように太る、というような状態でした。

第一夫人は家同士が決め、次からの妻は男性の好みで決められていたようです。当然4人の妻の間では常に問題が生じ、第一・二夫人は仲良く第三・四夫人は独立的です。第一夫人は女性の総取締役的立場で、「お姉さん」と呼ばれ敬われているようです。第二夫人以降は自由な地位にあり、第四夫人は、娘かそれ以上に歳離れた女性を選ばれるのが常です。

旧スタッフのサタもウムも第二夫人として、それなりの自由な立場であり、カラで仕事をするのが家族会議で許され、我々と活動を共にすることが出来ました。家族会議で許されると言うことは、とりもなおさず家族全体が彼女の収入を当てにしているということです。サタもウムもいつも私(村上)に、アフリカでは女性の立場がいかに弱く苦労が多いか、「女は毛布と同じだ」と言われ、男性の犠牲になっていることや、物のように扱われていることを、綿々と語っていました。

しかし、支援事業として20年近く活動をした結果、それまでの常識に与えた影響は大きいようです。女性の立場が徐々に変わり、男性にも女性の力が理解されるようになってきました。その要因は、勿論女性たちの努力や彼女の潜在能力の高さもありますが、プロジェクトと共に歩み、収入を得るようになったことが非常に大きいと思います。

首都では社会的に高い地位についている女性の比率は日本より高いかも知れません。大統領夫人がリーダーとして活躍する人権を考える組織もありますが、実際に「人権」が必要とされる人の多い田舎には、交通の便も悪く、そのような活動が広報されているわけではありません。村部では「人権」という言葉も「発展・男女平等」という言葉も知らない女性が非常に多いのです。

そんな状態の中で女性を男性に認めさせるのはどうするか? その答えはやはり「お金を得る・持つ」ことのようにです。女性が何かを始めようと思った時、固定観念として、女性は夫に、または家長に許可を得ることから始めなければなりません。他村で開かれる市場へ行くこと、識字教室や適正技術教室へ通うことも夫に許してもらわないと参加ができないのです。勉強が好きでも女の子は学校へ行かせてもらえません。しかし、女性が何に対しても活発に、積極的に行動するようになり、助産師にまで出世するようになった現在、男性は女性を認める様になったのです。

それは「うちの女房はカネを得てくる」という喜びから、字が書けるようになって役職に付いている、など様々な理由があると思います。

現在、村の女性たちは、野菜栽培と女性適正技術等から確実に収入を得ることが出来る様になりました。

では、事業を通じて平均的にどれだけの収入を得ているか、カラの現地スタッフの調査によると次のようです。

- ・一番収入を得る事業は野菜の販売収入。年間推定収入15,000cfa(3000円)
- ・女性適正事業技術による製作・製造物販売収入。年間推定収入10,000cfa(2000円)
- ・マイクロクレジットからの収入。年間推定収入10,000cfa(2000円)と推定されます。

他に個人的なものとして、ピーナツ生産(家族所有の畑とは別の畑のため、個人収入となる)、ジュース用のハイビスカスの栽培、カリテの実からの精油等が主要なものです。カリテの実(降雨事情)に左右され、安定的ではありません。

これらを見て、女性(一般的主婦)が得る収入は年間50,000cfa(10000円)位と思います。この収入は小学校の普通教師の1ヶ月分の給料に相当します。また、たとえ現金収入は少なくても、主食・野菜類を自家栽培でまかなうようになってきたため、経済的には大助かりだと思います。

このように発展途上国の女性は、真摯に学び、生活を通して自らの力で地位を確立して行くようです。必要に応じなすべきことに気が付き、それを得た喜びが次へとつながる。大金持ちになることや社会的地位を求めようとする野望は持たず、誰かが亡くなれば村中で悲しみ、誰かが結婚すれば村中みんな祝う。そのように平和に穏やかに生きて行く様は、手付かずの自然と同じように美しく、昨今の日本社会では見る事の出来ない「豊かさ」を感じます。

「支援事業=人材育成」とも言われますが、技術者や専門職の人材育成だけではなく、発展を束縛している意識の改革を促すことがとても重要だと考えます。

アフリカの女性(男性も同様に)は時間はかかるでしょうが、もっともっと豊かに発展して行く素質を十分に持っていると思いますし、我々のような支援する側の責任も非常に大きく、わが子を育てるように考える必要がある、という事を改めて認識しています。



夕飯を待つ子供達と母親

国内活動

- 2/15 【国際ソロプチミスト 帯広みどり 3クラブ合同セミナー】にて講演 帯広市北海道ホテル
- 2/17 【国際ソロプチミスト 町田 定例会】にて講演 ホテル・エルシー
- 2/26 【国際ソロプチミスト 伊那 通常例会】にて講演 伊那市図書館
- 3/16 カラ主催チャリティーコンサート【かけはし2014】 銀座・十字ホール
- 3/19 【国際ソロプチミスト 新潟はまなす 創立20周年記念講演会】にて講演 新発田市
- <2014年4月以降の予定> *変更になる場合がございますので、詳細については事務局までお問い合わせください。
- 4/26 【国際ソロプチミスト日本北リジョン第28回大会日本財団分科会】にて講演 札幌市教育文化会館
- 5/17 明星大学にて講演 明星大学
- 5/22 【東京白梅会】にて活動紹介 中野サンプラザ
- 6/29 【武蔵野市男女共同参画週間事業】にて連日パネル展示 武蔵野プレイス(武蔵境駅南口徒歩1分)
講演【「アフリカの女性の今」自立への挑戦】 武蔵野プレイス3階スペースC
午後3時30分～5時30分(予定)(日程変更あり)
- トーク【マンスール・ジャーニュと村上一枝】 *詳細は事務局へお尋ねください。
- 8/29 【2014年国際理解協カプログラム】にて講演「学ぶ喜び アフリカにつなぐ(仮)」
宮城学院中学校高等学校
- 12/18 【かけはし スペシャル2014】 銀座・十字屋ホール

からばす(Calebasse)-第31号- 2014年4月1日発行

特定非営利活動法人 **カラ=西アフリカ農村自立協力会**

<http://ongcara.org/>

東京事務局

〒180-0002 東京都武蔵野市吉祥寺東町1-1-6-102

Tel:0422-29-7640 Fax:0422-29-7688

E-mail: centre@ongcara.org

バマコ事務局

BP E367 BAMAKO MALI

Tel:223-2020-9096 Fax:223-2020-3589